

育苗土の作り方

苗作りから、化学肥料や農薬などの化学薬品を使わずに有機栽培で作りましょう。『苗半作』とよく言いますが、良い苗を作ることその作物の半分を決めてしまうほど、重要なことです。良い土で作った苗は、根がしっかりと張り、がっしりとした苗になり、定植後の生育に優れています。

作り方は一通りではなく、そのときにある材料で、色々な配合で作ることができます。下記はその一例です。

<材料>

| | |
|-------------------|---|
| 土 | 40リットル (土に含まれる水分により、重さが異なりますので、リットルで計ります。目盛りの付いたバケツを使うと便利です。) |
| もみがら | 20リットル |
| 米ぬか | 10リットル |
| アミノ酸ボカシ (EMボカシ 型) | 1kg |
| ゴマ粕 | 2kg |
| 活性液 | 100cc |
| 水 | 4リットル |

全体量が少ないと、温度が上がらない場合がありますので、ご注意ください。

<作り方>

土、もみがら、米ぬか、ボカシ、ゴマ粕を床に一ヶ所に積み上げます。

水に活性液を溶かし、混ぜます。

をジョウロでかけながら、スコップ (角型のものが使いやすい) で全体を切り返すように混ぜます。まんべんなく均一に混ぜるのがコツです。

全体が良く混ざるまで切り返します。水分が足りないときは、この時に水を加えながら切り返し、水分を調整します。握って団子状になり、指でつつくと壊れるくらいが目安です。

出来れば、直接雨の当たらない所に積んでおきます。(雨が当たると、水分が多くなりすぎて、発酵がうまくいきませんので、屋根のないところでは、必ずシートなどで覆います。)

しばらくすると、熱が上がってきます。50 前後になったら、切り返しをします。(60 以上になると、窒素分がとんでしまいます。また、高温菌が優先し、一番働いて欲しい中温菌が活発に働いてくれませんので気をつけましょう。)

一度切り返しても、また熱が出てきます。熱が出なくなるまで、何度も切り返しましょう。熱が出ることにより、水分も飛びますので、乾いてきたら、ジョウロで水をかけながら切り返しをします。

温度が上がらなくなるまでしっかり発酵させることが大切です。水をかけて切り返しても、温度が上がらないようなら完成です。少なくとも3ヶ月以上は切り返しをしながら置いておきましょう。

冬場など10 以下だと発酵が進まないなので、なるべく暖かい所に置くようにし(50 くらいの湯を入れた湯たんぽ (ペットボトル) を入れると初期の温度が上がります) 発酵期間を長くとりましょう。完熟になるまで発酵を促進させないと、病害虫が発生したり、苗の生育不良の原因になりますので注意してください。

きゅうり・スイカ・メロンなど、**立ち枯れ病**がしやすいので、土を焼くと、病害虫を防ぐことができます。**焼土(土を焼くこと)**は、厚手の鉄板の下にブロックなどをかませて、30～40cm高くし、そこに薪をくべます。鉄板の上に育苗土を15cmくらいの厚さに平らにのせ、土の中ほどに温度計をさします。焼いている土の上にゴザを掛け、温度が均一に上がるようにし、60℃になったら切り返します。(温度が高すぎると、有効な微生物や有効菌まで殺してしまいますので、温度が高くなりすぎないように十分注意してください。)切り返して、もう一度60℃になったら、出来上がりです。直接土に触れないようにビニールなどをしき、その上に焼土した土をおき、60℃の温度が保たれるように、上からゴザをかけ、しばらく蒸らします。冷めたら、ビニール袋などに入れ、口をしっかり縛ります。

<保存方法>

- ・ 育苗土が出来上がったら、ビニール袋などに入れて、口をしっかりひもで縛ります。(土が乾きすぎても、湿りすぎても使いにくいので、ビニール袋などに入れ、適度な水分を保つようにします。)

<使い方>

- ・ そのままでも使えますが、作物により肥料分が多くてよいものと、少なくともよいものがあります。作物によっては、そのままだと肥料分が多く、アブラムシなどが出ることがありますので、様子を見ながら、土(出来れば山土などが病気がなくてよいが、病気けのない畑の土や砂でもよい)や腐葉土を混ぜ、肥料分を調整するとよいです。
- ・ 穴の小さなトレイに種を蒔く時は、ふるいで土をふるってから、種蒔きをしてください。